

「金銭」「仕事」「家庭」「体力」の
4つの軸から

現代既婚男性の余裕度を考える

「既婚男性」について、どのようなイメージがあるだろうか。結婚したてで金銭的に苦しい20代。仕事、仕事の30代。教育費と住宅ローンが重くのしかかる40代。子供に手がかからなくなって悠々自適の50代。・・・漠然とこんなイメージがある。このイメージはバブルが弾け、週休二日が定着した現在も変わらないのであろうか。

- ・ 苦しい家計、乏しいこづかいの解消法！昼食費は家計から……20代パパ
- ・ 育児責任もあり、残業ままならない30代パパは昼休みも仕事をしています
- ・ あと少し、頑張って！体力衰えるもまだまだ厳しい40代
- ・ 体力維持の特効薬、悠々自適の50代

92年の夏においても、従来イメージ通りの一生懸命働く日本男性の姿が捉えられた。だがよく見ると2つの新しい状況が捉えられたのではないか。1つは従来通りの「働きバチ」に見える男性の価値観は40代前半からは家庭へ大きく変換している。にもかかわらず「家庭は憩の場」とせざるを得ないほど仕事の負担は相変わらず強い。これは50代以降の男性には無かった矛盾である。2つめは、最も忙しい30代前半よりも、30代後半の男性の仕事の負担感が大きく、日本の既婚男性は、50代に入るまでは経済的余裕と体力的余裕の両方を同時に手に入れることができにくくなっている。

1993.10/8

ポラ文化研究所
担当：岡林・渡辺

【調査概要】

○「年齢別にみた男性の意識と行動調査 '92」

<調査対象>

東京30キロ圏内に居住する16～65歳までの男性計1050人。

今回のレポートではそのうち、25～59歳までの既婚男性425名を考察の対象とした。

<調査対象者抽出法>

エリアサンプリング法

<調査期間>

1992年7月

<調査方法>

個別訪問面接聴取、および一部留置法併用

○サンプルモデル

年齢別 (人数)	既婚率 (%)	同居の子がいる率 (%)
25～29歳 (75人)	100	77
30～34歳 (75人)	100	93
35～39歳 (75人)	100	93
42～45歳 (100人)	99	96
46～49歳 (100人)	97	96
50～59歳 (100人)	98	81

1. 余裕度

【年代別の特徴】

- ・ 20代は金銭面では余裕が少ないものの、家庭面ではコミュニケーションは充分。
- ・ 30代前半は20代よりも金銭面では余裕は生じてくるものの、仕事に追われる生活。
- ・ 30代後半は仕事にもやや余裕が出来てくるが、体力面で余裕が減少。
- ・ 40代前半は仕事・金銭面でさらに余裕が増加、体力はますます減少する。
- ・ 40代後半は一時的に金銭的余裕が減少、住宅や子供の教育などの影響か？
また、家庭面では夫婦のコミュニケーションの平均時間が減少。
- ・ 50代は体力の衰えを自覚するも、仕事面でも金銭面でも悠々自適の生活。

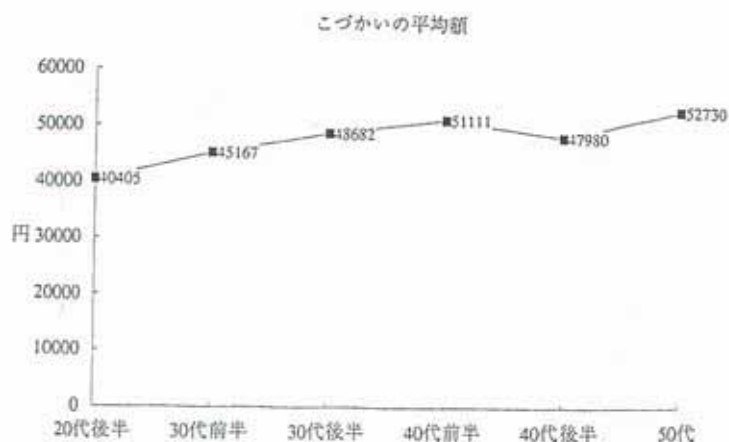
1-1. 金銭面

20代後半は金銭的な余裕が少ない。40代後半でこづかいは少なくなるが、全体的な傾向としては年代が上がるにつれて金銭的な余裕は増加する。

(1) こづかい

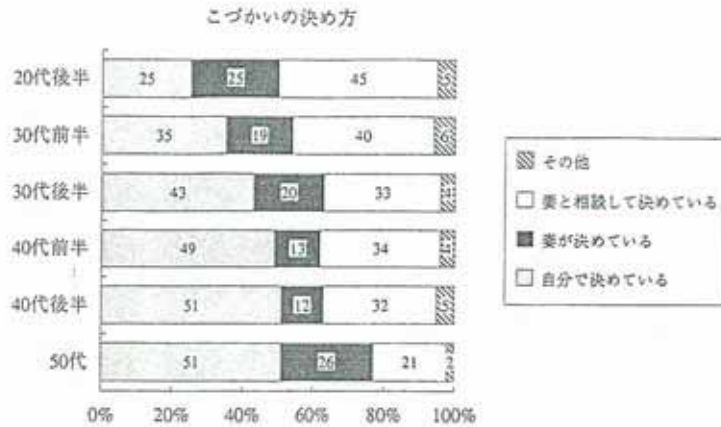
・ こづかいの平均額

全体の平均は46,416円、こづかいの平均額は年代が上がるにしたがって上昇していくが、40代後半では一時的に減少、30代後半よりも少なくなっている。



・こづかいの決めかた

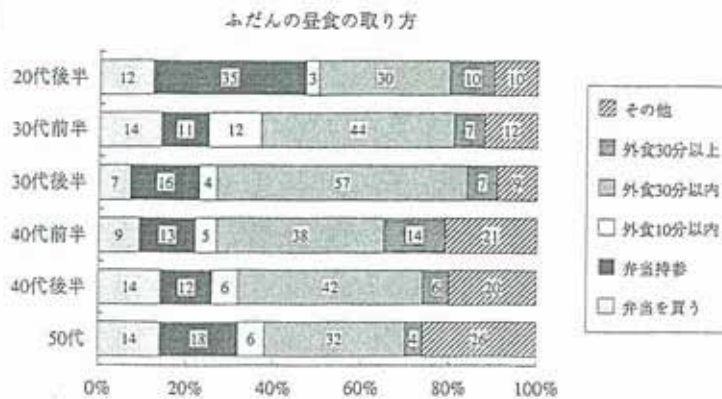
20代後半は“自分で決めている”が4人に1人と全年代中最少。一方“妻が決めている”“妻と相談して決めている”をあわせると、自分のこづかいを決めるにあたって70%が妻の意見に影響される。この傾向は年代が上がるにしたがって減少し、40代に入ると半数が自分で決められるようになる。



(2) ふだんの昼食の取りかた

20代後半では“弁当持参”派は35%、“弁当を買う”をあわせると弁当派は半数近くにもなる。これは愛妻弁当という一面もあるが、経済的な面も無視できないのではないか。

弁当派は40代前半を最小に、以後増えている。



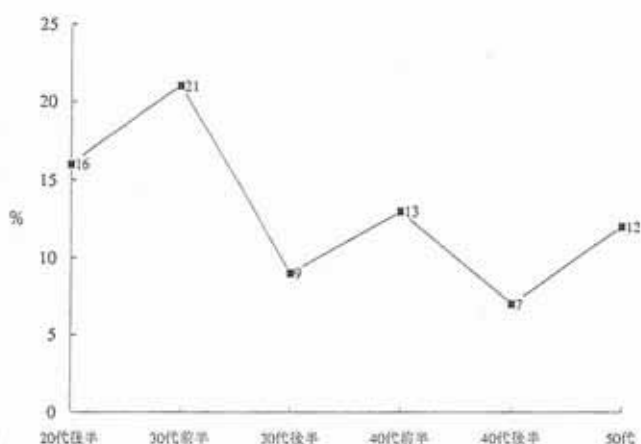
1-2. 仕事面

どの項目を見ても30代前半の仕事に追われている様子がみられる。仕事への関心も高いが子育てへの関心もあり、残業ができない事情が考えられる。

(1) ふだんの昼休みや休憩時間に“仕事をしている人”

昼休みに“仕事”をしている人は30代前半が一番多く21%に達するが、30代後半以降になると半減し、10%前後になる。

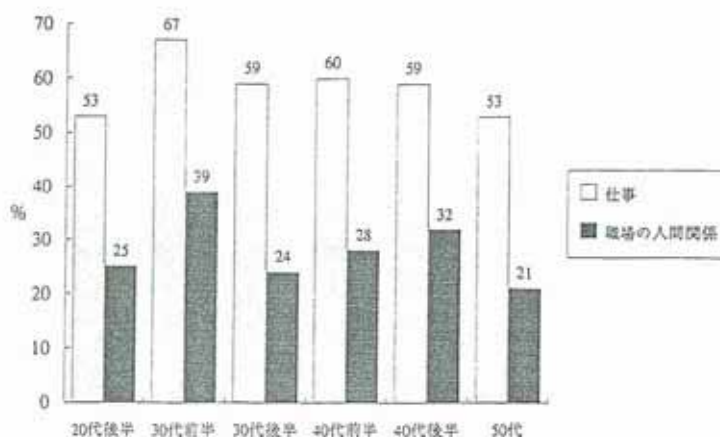
ふだん職場の休憩時間に、仕事をしている



(2) 仕事への関心

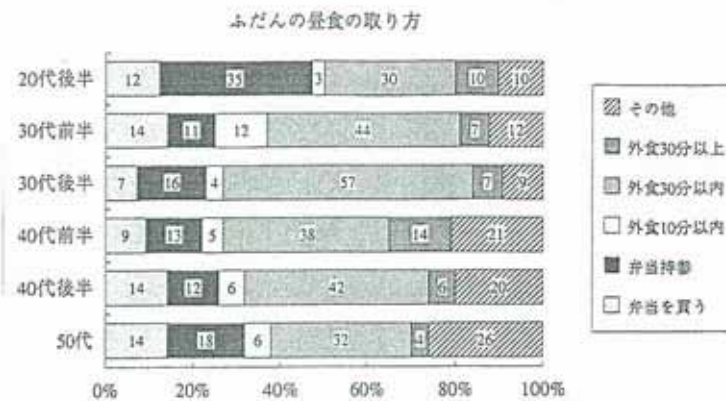
“友人・知人との雑談の話題”ではどの年代も“仕事”が半数を越えていることが目をひくが、中でも30代前半では67%、また“職場の人間関係”も39%とともに全年代で最多となっていることから、意識面でも仕事のウェイトが高いことが伺える。

友人・知人との雑談で仕事・職場を話題にする



(3) ふだんの昼食の取りかた

前節で“弁当”を見たが、ここでは“外食時間”を見る。とくに30代前半では“外食10分以内”が14%と多い。また30代後半では“外食30分以内”が57%と、全年代で最多となっている。“外食30分以上”は40代前半で14%に増加するがそれ以降はまた減ってしまう。



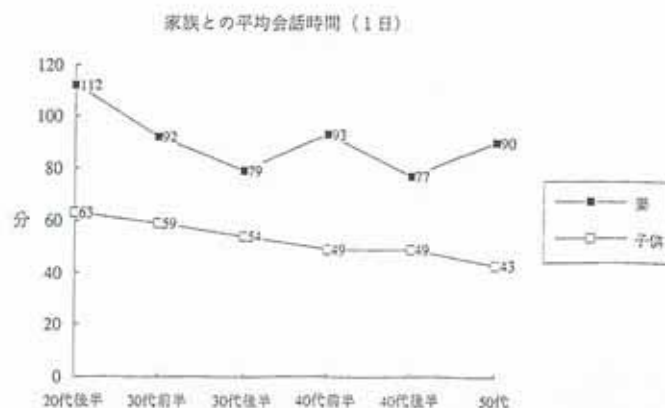
1-3. 家庭面

20代後半は夫婦のコミュニケーションを非常に大切にしている。30代～40代は家庭に“休息・憩いの場”を求めている、夫婦のコミュニケーション時間は激減。それでも不十分だとは思っていないところに男女のずれが生じるのではないか。

(1) 家族との平均会話時間

妻との平均会話時間では20代が最も多く30代から激減、40代前半と50代で一時的に増加するが、全体的に減少の傾向を示している。

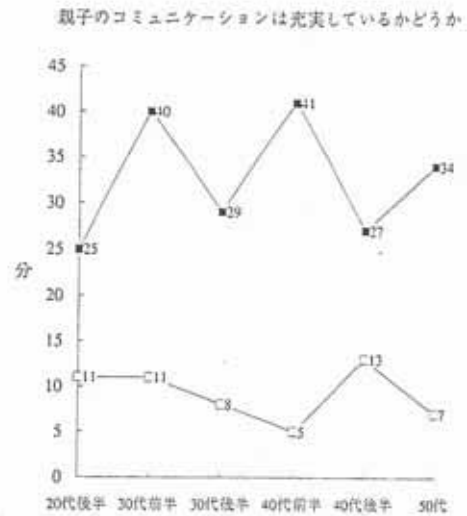
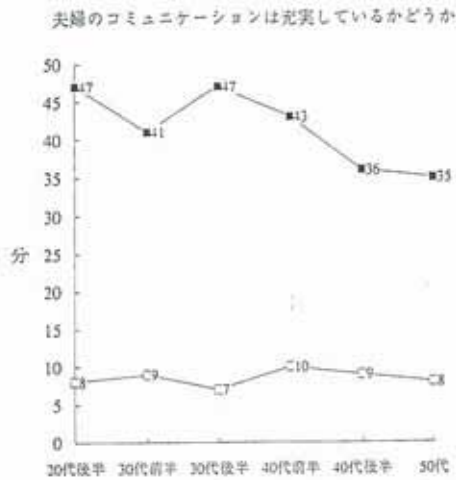
子供との平均会話時間では20代から徐々に減少していくが、これは子供の年齢が上がり、自立したためと見られる。



(2) 家庭内コミュニケーションへの満足度

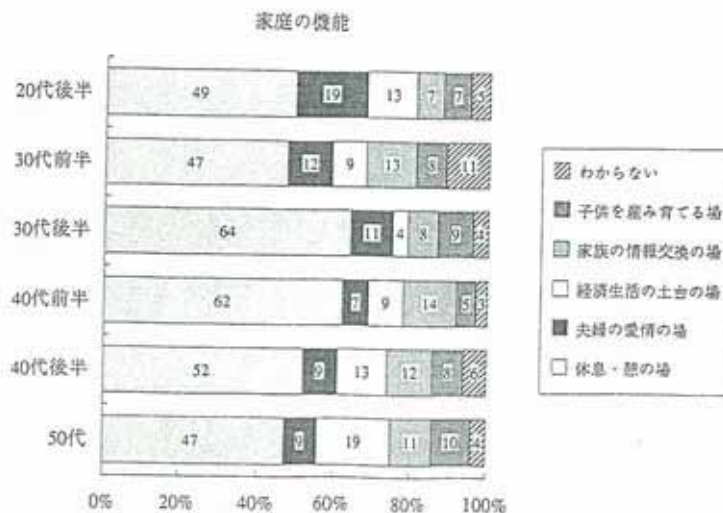
“夫婦のコミュニケーション”への充実感は、20代後半の47%が高く、40代後半から急に下がる。

“親子のコミュニケーション”への充実感は平均3割で、年齢の変化はない。不十分である”は40代後半で増加している。



(3) 家庭の機能

どの年代も“休息・憩いの場”とする人が最も多いが、特に30代後半の64%と40代前半の62%が目を引く。また20代後半では“夫婦の愛情の場”が、50代では“経済生活の土台の場”がそれぞれ19%と全年代で最も多い。

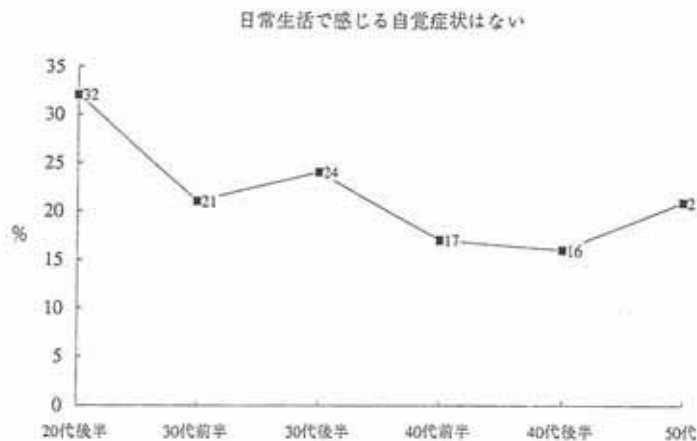


1-4. 体力面

30代後半から体力がおちはじめ、40代では著しく低下する。しかし40代と50代の「自覚症状」や「休憩時間の過ごし方」を比較すると、むしろ50代のほうが体力的に余裕がある。「体力的な余裕」という点では40代が全年代で最も低いと言える。

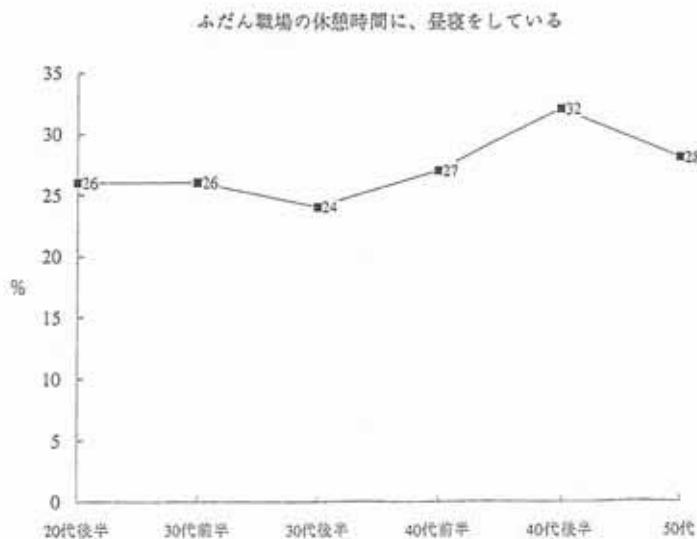
(1) ふだんの自覚症状

ふだん感じる自覚症状を尋ねたところ、“自覚症状はない”と答えた人は20代後半では32%だったのに対し、30代前半では21%と下がる。後述の他の項目を見ると30代前半は体力面の余裕はあるはずであるが、仕事が一番忙しい年代であることの影響がでているのであろう。さらに40代に至っては20%をきるようになり、40代の体力の低下をうかがうことができる。



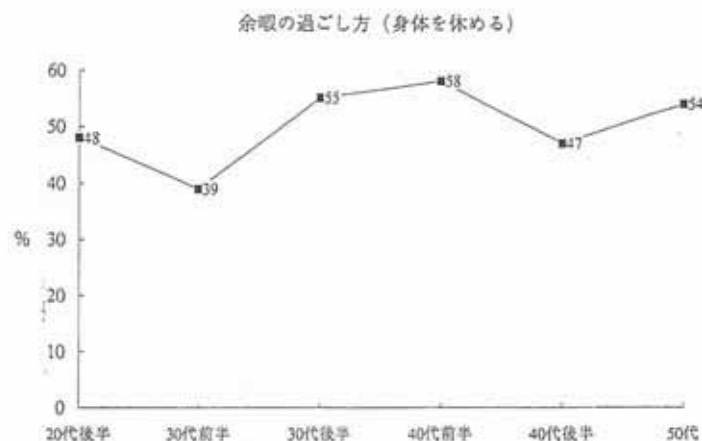
(2) ふだんの昼休みや休憩時間に“昼寝をする”

前節で休憩時間に仕事をする人について見てきた。ここでは昼寝をする人を見る。“昼寝”は40代前半から増加傾向にあり、40代後半では32%の人が職場の休憩時間に昼寝していることになる。



(3) 休日のすごしかた

「休日は外で過ごすことが多い」人は、40代に入ると激減し、40代後半で若干持ち直すものの50代になると40%をきるようになる。また、「余暇のすごしかた」で“身体を休める”と答えた人は30代後半で激増、30代後半以降は半数の人が余暇に身体を休めている。



(4) 健康への関心

“健康”を話題にする人は30代後半から急増し、40代後半で一時的に下がるものの50代では41%に達する。



2. 満足度

「現在の生活で充実している点」「現在不十分な点」への解答から彼等の満足度と関心の強さを考察する。13項目の結果を一覧表で示す。

現在充実している事項

	衣服	食生活	住まい	レジャー	教養	子供の成長	収入
20代後半	16	36	13	15	1	57	9
30代前半	17	43	21	15	5	69	8
30代後半	20	40	32	24	16	63	16
40代前半	15	35	22	21	8	54	10
40代後半	16	40	25	10	9	49	11
50代	26	45	40	20	11	55	17

	家計費	資産	家族間の愛情	近所付き合い	仕事	健康	なし
20代後半	4	4	44	9	40	43	0
30代前半	5	1	44	11	32	40	1
30代後半	9	8	45	15	40	43	1
40代前半	5	2	50	19	35	31	1
40代後半	3	2	35	22	45	41	1
50代	4	9	35	22	44	50	2

*あみかけ・太字は最高値

現在不十分な事項

	衣服	食生活	住まい	レジャー	教養	子供の成長	収入
20代後半	12	7	44	24	20	0	49
30代前半	12	8	51	19	9	1	61
30代後半	7	4	40	21	5	3	40
40代前半	2	1	36	25	5	0	44
40代後半	9	3	36	26	12	3	44
50代	3	5	24	19	10	1	30

	家計費	資産	家族間の愛情	近所付き合い	仕事	健康	なし
20代後半	17	33	4	13	20	7	9
30代前半	19	48	1	9	19	13	4
30代後半	16	33	3	0	15	9	5
40代前半	12	39	2	4	15	12	5
40代後半	17	44	3	5	18	10	5
50代	8	36	5	10	14	11	12

*あみかけ・太字は最高値

2-1. 経済的に満足できるのはやっと50代に入ってから

衣服、食生活、住いなどの「日常生活の質」に関する基本的な要素ですら、20代後半から30代前半に掛けては大変不満が大きい。しかもこの年代は従来と異なり、同年代に未婚層やいわゆるDINKSといわれる「次世代扶養の義務から免れている」層も多く、そのひっばく観は切実であろう。

従って、一息できるのはやっと30代も後半に入っているようである。その後も子供の成長にともない、経費が嵩むのか40代で再度不満が強まる。そして、50代で初めて急速に満足度が高まる。こうしてみると子育て家庭には押し並べて鬱屈した不満があるといえる。

2-2. 生活の余裕のなさを、何を支えに働くのか

それでは、働き盛りの30代後半から40代に掛けての日本の既婚男性が何を心の支えにしているのかを更に考察してみよう。まず団塊世代（ここでは42～45歳）から価値観の大きな転換がおきていることが注目される。40代後半より年上の人達と較べると「近所つきあい」「仕事」と「家族間の愛情」で逆点がおきている。しかしながらレポートの中で見たように「妻との会話時間」「家庭の機能」を見ると決して団塊世代より若い人達が家族との充実した生活を送っているとは考えられないのである。むしろ現実の疲労の前に家庭に「憩い」を求めざるを得ない状態が相変らず続いている。

30代は子供も小さく、実際は昼休みも仕事をしなければならないほどの忙しさの中で、「子供の成長」への生き生きした充実感が、その高い数字から伝わってくる。だが40代に入った、あるいは小さな子供との触れ合いから解放された男性がどこに本当の満足を得ているのかが見えてこない。「不十分な項目」を見ると40代を特徴づける関心は「レジャー」である。仕事よりも家族を重視しつつも、その家庭は「憩い」と「経済生活」の場になりがちである。このことを40代男性は正面から見つめることなくレジャーに関心を向けているのが現状である。

2-3. まとめ＝豊かな高齢化社会に向けて

「仕事よりも家庭」という大きな価値観の変化が起きているのにもかかわらず、30代後半から40代前半に掛けての男性は、体力の衰え以上の仕事を背負って、従来の男性同様な生活を送っているようである。そのことが「家庭の機能」の選択肢となって端的に現れていることが判った。家庭が「憩の場」へと墮したのち、男性に余裕ができてくる40代後半から家庭は「経済生活の場」へとさらに落としめられてしまうことが判る。それを防ぐためには、昼休みにも仕事をせざるを得ない30代前半の働き方から根本的に変えていく必要があるのではないか。レジャーに楽しみを見いだせる40代はまだよいとして、仕事から離れた後に「経済生活の場」としての家庭だけが残るとしてら、淋しい老後ではないだろうか。